

シリーズ②

授業を
どう変える!?

ビジュアル解説 小学校国語

アスレチックのような国語授業に!



東京学芸大学准教授

細川 太輔

アスレチックは、子どもたちが夢中になって遊んでいるけれど、子どもたちには自然に力が付いています。そんな授業ができるようになればよいと考えています。そのためには、教師が「〇〇しよう!」というのではなく、子どもたちから「〇〇したい!」というように主体的に取り組んでいるように仕向ける必要があります。話し合いをするにも、教師が強制的に話し合わせるのではなく、学び合うことはいいことだと実感していった、子どもたちが学び合いたいときに話し合うような学級をつくっていくことがよいと思います。

それから、言語活動は、一部ではなくて、全員の子どもがするような授業にしなければいけないと考えています。一人ひとりの子ども自身が、言葉を使ったり、聞いたり読んだりしないと、本当の力は付かないのではないのでしょうか。

「指導事項」から授業をつくって!

今回の改訂では、育成を目指す資質・能力が重視され、国語科の目標においても「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成することを目指す」としています。その上で、資質・能力を示した指導事項が身に付くよう指導することとしています。

新学習指導要領に基づいた授業を構想する際には、こうした指導事項を基に、子どもたちにとって必要な資質・能力を明確にしていけることが大切です。そのためには、指導事項の解説を読み、子どもが実際にどのような姿になればよいのかを具体的に捉えられるようにしていきます。さらに、言語活動を通して資質・能力を身に付けることから、教師自身も実際に取り上げる言語活動を行い、身に付けさせたい国語科の資質・能力を具体化し顕在化していくことが大切です。「教材から授業をつくる」授業から、子どもの実態と照らし合わせながら「指導事項から授業をつくる」授業へと改善していきましょう。



文部科学省教科調査官

菊池 英慈



資料 [1] 新学習指導要領の目標（国語）

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。（知識及び技能）
- 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。（思考力、判断力、表現力等）
- 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。（学びに向かう力、人間性等）

資料 [2] 学習内容の改善・充実のポイント

【語彙】

第1・2学年	第3・4学年	第5・6学年
オ 身近なことを表す語句 ・意味によるまとまりに気付け	オ 様子や行動、気持ちや性格を表す語句 ・性質や役割によるまとまりを理解	オ 思考に関わる語句 ・語句と語句との関係、語句の構成や変化を理解

【情報の扱い方】

第1・2学年	第3・4学年	第5・6学年
ア 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係を理解	ア 考えとそれを変える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係を理解	ア 原因と結果など情報と情報との関係を理解

【考えの形成】

A 話すこと・聞くこと	B 書くこと	C 読むこと
○話題の設定 ○情報の収集 (話すこと) 〇内容の検討 〇構成の検討 〇考えの形成 〇表現 〇共有	○題材の設定 ○情報の収集 〇内容の検討 〇構成の検討 〇考えの形成 〇表現 〇共有	〇構成と内容の把握 〇精査・解釈 〇考えの形成 〇共有

資料 [3] 「言葉による見方・考え方を働かせることを促す発問例

この言葉って、
どういう意味だ
ろう？



この二つの文は、
どちらの方がかり
やすい？ なぜ？

そのときの空は、ほ
くには、見たことも
ない「赤」に見えた。



この「赤」って、色
のことに他に、何か表
していないかな？

＊言葉に着目して文脈の中で読む。

新学習指導要領の改訂のポイントとは？

細川 来年から実施される新学習指導要領の、国語科の改訂のポイントを教えてください。

菊池 まず教科の目標及び内容の構成が改善されたことです。国語科では、国語科で育成を目指す資質・能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と規定し、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理しました。また、このような資質・能力を育成するためには、児童が「言葉による見方・考え方を」働かせることが必要であることを示しています。

これを踏まえて、従前、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域及び「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」で構成していた内容を、「知識及び技能」及び「思考力、判断力、表現力等」に構成し直しました。（資料 [1]）

細川 「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」の各指導事項で、内容の改善を図ったことについて、主なものを教えてください。

菊池 一つ目は、語彙指導の改善・充実です。「語彙」については、どの段階においても語句の量を増やすとともに、語句を使い慣れしていくところまで指導していくことが重要です。そのためには、日々の生活や授業の中で、言葉に興味をもたせ、「おもしろい」「使ってみたいな」という気持ちにさせ、言葉を集めたり比較したりして、実際にその言葉を使って表現させる場を設けていくことが大切です。

二つ目は、情報の扱い方に関する指導の改善・充実です。話や文章に含まれている情報を取り出して整理したり、その関係を捉えたりすることが、話や文章を正確に理解することにつながり、また、自分のもつ情報を整理して、その関係を分かりやすく明確にすることが、話や文章で適切に表現することにつながるため、このような情報の扱い方に関する「知識及び技能」は国語科において育成すべき重要な資質・能力の一つです。こうした資質・能力の育成に向け、「情報の扱い方に関する事項」を新設し、「情報と情報との関係」と「情報の整理」の二つの系統に整理して示しました。

三つ目は、学習過程の明確化「考えの形成」の重視です。「思考力、判断力、表現力等」の各領域において、学習過程を一層明確にし、各指導事項を位置付けました。また、全ての領域において、自分の考えを形成する学習過程を重視し、「考えの形成」に関する指導事項を位置付けました。自分の考えを形成していくためには、その目的を明確にし、必要な情報を取捨選択したり、整理したり、自分の知識や経験と結び付けながら再構築していくことが重要です。（資料 [2]）

「言葉による見方・考え方を働かせる」とは？

細川 それでは、目標の冒頭にある、「言葉による見方・考え方を働かせ」とはどういうことなのでしょう。

菊池 子どもたちが学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を言葉の意味、働き、使い方等に注目して、捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることと考えられます。自分の思いや考えを深めるために、話や文章を「着目すべき様々な側面」から総合的に思考・判断

して、理解したり表現したりしていくことです。また、その理解や表現について改めて意識的に着目して吟味することです。（資料 [3]・[4]）

資料 [4] 意識的に着目すべき側面

- 言葉の意味：言葉が指し示す意味
- 言葉の働き：事物の内容を表したり人とのつながりをつくる働き
- 言葉の使い方：相手や状況によって変える使い方

学びを主体的にするための仕掛けとは？

細川 子どもたちの学びが主体的になるために、先生方はいろいろ仕掛けをすると思いますが、効果的だと思われる事例がありましたらご紹介ください。

菊池 まず、子どもたちの「学びが主体的」というときに、国語の場合、「言葉に主体的になっているか」ということを確認したいと思います。例えば、「1年生に音読発表会をしよう」として、進んでやろうとしているということは一般的には主体的ではありますが、相手や目的を意識して、より言葉を吟味しながら精選していくような学習にしないと、言葉に着目した、言葉に主体的に取り組んでいる国語の学習の姿とは言えないと思います。

そこで、より言葉に意識的に着目するためには、異質なものと関わらせることが大切だと思います。例えば、自分の表現した言葉と友達が表現した言葉を比較したり、書き手や書きぶりの違う文章とを比較したりすることで、より言葉に主体的に着目していくようになっていきます。（資料 [5]）

細川 確かに、自分とは違う他者が、自分の使う言葉を解釈できるのかどうかを理解した上で、言葉を吟味していくようになると、言葉に主体的な学習になるように思います。

国語の学習評価はどのようにするのか？

細川 学習指導要領が新しくなり、国語科の学習評価はどのようにしていくとよいのでしょうか。

菊池 学習評価は、学校における教育活動に関し、子どもの学習状況を評価するものです。「子どもがどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、子ども自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるよう学習改善につながるものにしていかなければなりません。こうした教師の指導改善や子どもの学習改善につながる二つの側面があることを理解しておく必要があります。

また、評価時期や評価方法の工夫を考慮しておく必要があります。実際の評価においては、国語科の目標の実現に向けた学習状況を把握するために、指導内容や子どもの特性に応じて、単元や題材などのまとまりの内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫し、学習過程の適切な場面で評価する必要があります。さらに、資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、多様な活動を評価の対象とし、ペーパーテストの結果に留まらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要です。（資料 [6]）



資料 [5] 学びを主体的にしている例

【異質なものと関わ（らせ）る】

そこは、こんな
言葉に直して
みたら？



ぼくはこうしてみ
ただ、読んでみ
てくれる？

「その角を直角に
曲がって」とい
う説明はどうだ
ろう。



「直角」という言
葉は、1年生には
分からないと思
います。

＊言葉を介しながら吟味する。

資料 [6] 評価は、指導事項（資質・能力）が身に付いたときの「目指す子どもの姿」で見取る！

指導事項を絞り、言語活動を選ぶ

【3・4年生】

〈「B 書くこと」に関する指導事項〉

イ 書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えること。

〈言語活動例〉

ア 調べたことをまとめて報告するなど、事実やそれをもとに考えたことを書く活動。

言語活動は、ア〜フの中の
アにしよう！

言語活動をしてみる

＊目指す子どもたちの姿を想定する。

新聞の紙面は、いちばん伝えたいところをトップ記事にして、紙幅を多くとることで中心が分かりやすくなるんだな。



実際に評価する

Aさんは、トップ記事に多く紙幅を割いているな。そこをほめて評価してあげよう。

Bさんはどれも同じ紙幅だから、中心記事に紙幅を使うように指導しよう！

